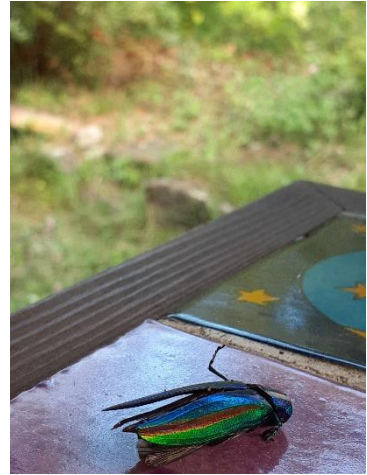


晩 夏

牧師 山本 護

草刈りをしていたら、礼拝堂入口の野百合のもとでタマムシが死んでいた。遠い日、まだ学校へあがる前のいま時分、タマムシが庭木へ飛んで来たところに出くわしました。昭和30年代の住宅街で近くには雑木林もあり、カブトムシやクワガタ、キリギリスや蝶の幼虫など捕まえた虫をやたらに飼っていた。でもタマムシは珍しく、興奮して網をふり回しましたが、こちらを一瞥して虚空へ飛んでいきました。

滅多に出会えないタマムシ。集会所軒下のカウンターに置いてしげしげ眺めた。その配色から即物的に、LGBTQの象徴であるレインボーフラッグが思い浮びました。この旗は虹色のように多様な生き方を語っていますが、タマムシの成虫はただ一匹でそんな多様性を抱えてひと夏を過ごすのか、と感傷的になって駄句ひとつ。



「玉虫は安らぎまなこ閉じられて」。昆虫は複眼でまなこ閉じようもないのですが、そこは文学。虹色は社会における個々の多様性ですが、その個である私自身の多様な側面をすべて表出している。私自身の隅々をすべて認めることは辛いことでしょう。タマムシは瞑目し、折々のいろいろな輝きから解放されて、うす暗いモノトーンの死で安らいでいる。季語ではない気もしますが、タマムシの死、晩夏です。

召された後、私たちが迎え入れられる天の御国とはどんなところでしょうか。「天の～玉座の上に座っている方がおられた。その方は、碧玉や赤めのうのようであり、玉座の周りにはエメラルドのような虹が輝いていた(黙示録 4:2～3)」。

隠喩とはいえ、ヨハネ黙示録に記された天国を想像すると疲れます。一方でまたこのような天国、「玉虫は安らぎまなこ閉じられて」の純情タマムシと違って、矛盾だらけの人間にしてみれば案外愉快かもしれません。教会の森で安らぐだけでなく、町のディスカウントショップ「ドンキホーテ」でめまいクラクラさせられたいのですから。

「玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へ導き、神が彼らの目から涙をことごとく、ぬぐわれる(7:17)」。ドンキホーテのような天国に辟易して来た頃合いで、小羊キリストが「命の水の泉」へ導いてくださり、生涯に流した数多の涙は、そのすべてを知る神によってぬぐいさられる。「玉虫は安らぎまなこ閉じられて」。

草刈りを終え、ひとこと祈ってタマムシを葬り、礼拝堂横の水道で水をガブガブ飲んだ。「命の水の泉」は現実なのだな。小羊キリストに導かれている、と感じました。Ω